

## 女子水

大松 達知

どのようにして言葉は使われてゆくのだろうか？ あるときふと新語が登場し、時を経て定着したり消滅したりする。しかし、使用頻度は下がっても、ニュアンスを変えて生き残ることもある。例えば、ドロンする、ナウい、バターキユー、めんごめんご、もちのろん、花金、ばっちぐー。今でもその「死語性」を狙って使われる。文脈がその生死を分ける。(胸キュン)なんて、もう日常語としては、恥ずかしすぎる。けれど、NHKテレビ「短歌de胸キュン」(二〇二二年三月終了)は、その故意に時代錯誤的な響きが、絶妙だった。

外塚喬『鳴禽』(本阿弥書店)には、珍しい(私が知らない)言葉が積極的に使われている。(高野公彦さんの方法に似ている。)そして、それが七十代の年齢意識をユーモラスに言い当て、悲哀を誘う。

いつになく気を引き締めてゐなくては老いの僻目ひがめに老いの僻耳ひがみみ

消し忘れ付け忘れはた面忘れおも老いにむかつてゆく路みち  
標しるべ

見た目ではわからぬならば蓄縮きうしゆくの老人を今はとほまきにせよ

僻目は見間違ひ、あるいは偏見。僻耳は聞き違ひ、あるいは思い過ごし。面忘れは人の顔を忘れること。蓄縮は堅苦しくて融通がきかないこと。それぞれ日常語ではないけれど死語とも言えない。知る人は知っていて、地下水脈のように受け継がれ、ときに汲み上げられてゆく。こういう言葉を意図的に採取した歌を読むのも楽しい。

酔ひざめの水うましこの女子水をなご飲めなくなりしときに死は来る

女子水をんなみづは女水をんなみづとも言う。軟水のこと。酔い覚めにはやはり口当たりのいい軟水がいい。とうぜん、硬水ごうみづは男水おとこみづ。こんな男女の区別は、ジエンダー表現に敏感なこのご時世、無自覚では使えないだろう。一部では(アクトレス)や(女優)だつて駆逐されようとしているし、そのうち女坂をんなざか男坂おとこざかと言わなくなるだろうか。(女湯男湯はあつても。)  
『鳴禽』には、他にも、空夢つくりゆめ、八竜日はちりゅうにち、打付け言うちつけこと、違言ちがひご、迂言うげん、まじくじ、丁子頭ちようしがしら、福白髪ふくはく、似非親にひか、道触りみちふ、掛り息子かきこ、本降ちほんふり、などあつて楽しい。誰がどのように言い出して継承されてきたのか。ひとつひとつの単語に発生と歴史があるのだ。ググればわかるかなあ。